

長生 (榮能春延壽)

へ長生の家こそ へ老せぬ門の若々と 若水汲みのあさ若き お湯殿
始庭かまど 煙ぞ今日の初霞 棚引きにけり 一ト刷毛に 絵の
書初の 熨斗宝珠 へ玉の櫛笥に髪飾る 白紅と絵元結 へ結ぶ
縁の妹と背を 命長かけ諸白髪迄 変はらぬ中と睦し月の着衣始
流行模様伊達小袖 へ仇と色とを濃い紫の 十九や二十は色
盛り へなまめく風を姿見に 写せば恋の十寸鏡 へ月の眉墨 花
の顔 雪の肌への衣紋つき へかいどりしとど振る袂 ゆらな手元に爪
琴の へ菜落と言ふも 草の名 茗荷と 言ふも草の名 富貴自
在徳ありて 冥加あらせ 給へや 春の花のきんぎよく 花風樂にり
ゆう花苑 りゆう花苑の黄鳥は 同じ 曲を囀る(ミゾ) へ弾初う
とう連れ唄や そのいろ糸の音にかよう 峰の松風松ばやし 四海
波風静にてく へ国も治まる代のためし へ射初長閑に弦の音
あづちも董 鼓草 春の姿の山笑う 笑う家には へ福引の 手に
糸遊ぶ綱手縄 真紅の色の厚房や 飾り立てたる黒の駒 へ誰言は
ねども御召ぞと 対の口取鮫鞘を 踵うたせて落とし差 揃ふ奴の
聲そろへ へ二人つんく連立ち サアく行くべいサア行くべい
嬉し目出度の十日の出まばゆき 金覆輪の へ鞍は梨地の鐙にあふり
手綱かい繰りしつとんく りうぐちきりを乗廻し くるりく
くるくるくくと 車にあらぬ輪乗の拍子と 轡の音がりんくから
く へりんがらがら はいどうくはいく へ 扱さて見事なお
馬乗初 勇ましき へ勇む春駒蘆原の 国も目出度き青海波
亀の齡の萬々歳 盡きせぬ御代こそ目出度けれ。